

1-5

保育所保育士による保育ソーシャルワークの可能性と養成教育のあり方に関する研究*

橋本好市

保育所の対象・範囲が子どもから保護者・地域へと拡大するに伴い、保育士の専門性向上を目的に保育士養成過程では、社会福祉・児童福祉・社会的養護等の基礎科目に加え「相談援助・保育相談支援・家庭支援・社会的養護内容」等ソーシャルワーク関係科目が増設された。日々保育現場でソーシャルワークスキルを活用した対応が求められてきているものの、援助・支援・ソーシャルワークの捉え方の曖昧さと、保育所業務に活かす難しさ、保育士がソーシャルワークを担うことへの力量・専門性等の観点から課題が多い。

保育士が社会福祉専門職としての価値・倫理観に裏づけられた専門的機能を発揮できるのであれば、「保育ソーシャルワーク」という実践領域を構築し、ターゲットとする①子ども自身②親(保護者)③親子関係④地域社会に対する取り組みに効果を発揮する可能性を有する。

そのためには、保育所保育士が「保育ソーシャルワーク」を担う①意義②整合性③理論的裏付け④対象・範囲・限界⑤養成教育のあり方等を焦点化した研究が必要となる。したがって、保育所保育士がソーシャルワークを担うことの可能性つまり保育ソーシャルワークという実践を鍵概念に、その専門性と職業的固有性、養成過程の課題等について明確化していくことを本研究の目的とした。

*平成27年度科学研究費補助金基盤研究「C」(課題番号:15K03994, 補助事業期間:平成27～29年度)。

1-6

教職協働による知の創造 ～ 知のネットワークの成長モデルの提案 ～

桐村豪文

高松邦彦 伴仲謙欣 野田育宏 中田康夫

大学がもつ教育、研究、社会貢献、大学運営の諸機能にかかわる様々な業務は、大学の中では分業されているのが通例である。それに対して昨今では、教員と職員とが役割分担するだけでなく、目標を共有しつつ協働して業務を遂行することが必要であるとの認識が広まっている。教職協働を「知」の観点から捉えるとき、それは異なる専門知の相互交流と見ることができ、その意義が最も発揮されるのは、異なる専門知が融合することにより新たな知が創造されるときである。しかし両者は互いに異質であるため、そこに到達するのは極めて困難である。

今回我々は、自校の教学マネジメントの改善に資することを目的として、教職協働によるその課題の可視化に取り組んだ。その結果、自校の教学マネジメントの全体を俯瞰することのできる活動システムを描く(新たな知の創造)に至った。そしてこの教職協働の動的なプロセスを「知」の観点から検討したところ、「増殖段階」「混在段階」「創造段階」の3段階を経ていることが示唆された。そこでこの3段階からなる知の創造プロセスを新たに「知のネットワークの成長モデル」として提案する。本モデルは、異質な関係にある複数の専門知が、相互交流を経て、新たな知の創造に至るまでのプロセスを動的に描いたものであり、教職協働をより円滑かつ効果的に進めることを可能にするモデルであると考えられる。